

# プラトン対話篇における アルキビアデスの描写に ついて

---

岩田萌子 博士課程後期 1年

## 1. はじめに

プラトン対話篇はローマの時代のトラシュマコスによる編纂以降、36編が読み継がれているが、一部はプラトンの著作であることが疑問視されている<sup>1)</sup>。『アルキビアデス I』は、真偽性が疑われている対話篇のひとつであり、古代から現在までの間で評価を大きく一転させた。

プラトン対話篇は基本的に登場人物とソクラテスの対話によって展開される。『アルキビアデス I』で話者となるアルキビアデスは、アテナイ都市のなかでも有力な一族の生まれであり、当時のアテナイの指導者であったペリクレスが後見人として付いていた。アルキビアデスの生涯については当時においても後世においても、様々な文献で逸話が残されている<sup>2)</sup>。容姿の美しさ、家の裕福さを兼ね備え、弁論にも長けていた彼は、かつてはソクラテスに追従していたものの、やがて彼から離反し政界で名を揚げようになった。クセノフォンの記述によれば、ソクラテスから離れて以降は放蕩とした生活を送るようになっていた。プルタルコス『英雄伝』や『モラリア』においても、その時分の逸話が数多く記されている。紀元前431年にペロポネソス戦争が始まり、前423年のニキアスの和約によって一端休戦となると、アルキビアデスは双方の不満を煽りこの和約を破棄させ、ニキアスを失脚に追い込んだ<sup>3)</sup>。さらに、シケリアへの遠征を提言するもその遠征の直前に神を冒瀆した罪で、アテナイで死刑判決を受けスパルタに逃亡した。スパルタで彼はアテナイの軍略を漏らしアテナイを不利な状況に追い込んだ<sup>4)</sup>。やがてスパルタでも死刑判決を受けた彼はベルシアに逃亡し、アテナイ人艦隊の長となった。このためアテナイでの死刑判決は取り消されたものの、艦隊の部下の指令無視によって海戦で敗北したために信用を失い、最期はベルシアからの刺客によって命を落とした<sup>5)</sup>。スパルタに敗れたアテナイは、条約によって防壁の破壊、戦力の削減、寡頭派として追放させられたアテナイ人の強制送還などを受けて全盛期を終えることとなる。アルキビアデスの政界での行動は、アテナイを衰退させた遠因として扱われるようになり、また、ソクラテスの告発を招く要因の一つともされた。ソクラテスの罪状として挙げられるものの一つに青年を墮落させた

罪があるが、墮落した青年の一例としてまさにアルキビアデスが挙げられている。

対話篇『アルキビアデス I』は、かつてプラトン哲学の基礎である「自己を知ること」を学ぶために最も適切かつ重要な作品として認められ、アルピノス『プラトン哲学入門』では最初に読むべき対話篇として推奨されていた<sup>6)</sup>。しかし、この評価は 19 世紀に入るとシュライエルマッハーが本作について「不確かかつ貧相な偽作」と評し、主軸をもたない「諸哲学の寄せ集め」と断じた<sup>7)</sup> ことを皮切りに一転し、真にプラトンが手がけた作品であるのかどうか疑問視されるようになった。例えば Dittmar はアイスキネスとクセノフォンからの影響が本作のアルキビアデスに見られる<sup>8)</sup> ことから、Heidel は内容にプラトンの要素を含みすぎていることから、本作を偽作とみなした<sup>9)</sup>。一方で、Annas は主軸がないことから偽作とみなしたシュライエルマッハーに対し、主軸は対話の相手であるアルキビアデスの「自己認識」にあり、アルキビアデスという人物が対話を通して自分自身について知ることを学ぶ過程を主軸としているという見解を提示した<sup>10)</sup>。

真偽をめぐる論争において、人物描写は偽作・真作のいずれの意見においてもほとんど重要視されることはなかった。実際プラトン対話篇は初期、中期、晩年期に渡り作風が大きく変化していくため<sup>11)</sup>、俯瞰的に各作品を照らし合わせるには考慮すべき点が多くある。しかし、人物描写はある特定時期・人物に限定すればプラトン対話篇の特徴のひとつとなりえるのではないか。プラトン対話篇、特に初期、中期に該当すると考えられる対話篇は、対話の主題や、要点となる概念に応じて人物、時間、場所が設定される傾向がある<sup>12)</sup>。この特徴が顕著であるのが、複数の対話篇に共通して登場する人物たちである。例えば、パイドロスは『饗宴』『パイドロス』に共通して登場し、そのどちらでも「恋」についての問答を行う。『テアイテトス』、『ソフィステース』で共通して登場するテアイテトスは、両作品で「知識<sup>13)</sup>」についての対話に参加している。このように、複数の対話篇に登場する人物は、度々類同したテーマと結びついていることが見受けられる。アルキビアデスもまた、複数作品に登場する人物の一人であり、『アルキビ

アデス I』のほかに、『饗宴』『プロタゴラス』の2作品に登場している。『アルキビアデス I』の執筆時期については諸説あるが<sup>14)</sup>、『饗宴』と『プロタゴラス』と同じく中期の頃に執筆されたと推測され、年代的な大きな差はないと考えられる。『饗宴』におけるアルキビアデスの役割についてはソクラテスとの関係の示唆などから研究対象とされたこともあるが<sup>15)</sup>、『プロタゴラス』における彼については、その出番が僅かであることもあり注目されることは少ない。各作品において、彼がどのような人物として描かれているかを俯瞰することで、アルキビアデスにもまた、対話篇全体で共通した特定の議題を見いだすことができるのではないかと Annas は『アルキビアデス I』の主軸として自己認識を提示したが、この「自己認識」こそ、まさにプラトン対話篇全体においてアルキビアデスと結びついた概念なのではないか。本稿はプラトン対話篇の各作品において、アルキビアデスが、どのように描写されているかをそれぞれ分析することを通して、対話篇におけるアルキビアデスが、どのような役割を持っているのかを検討することを主要目的とする。また、そうした描写の仕方がプラトン特有のものであるかを検討するために、度々描写の類似を指摘されるアイスキネスによる『アルキビアデス』断片、クセノフォン『ソクラテスの思い出』との比較を試みる。

## 2. 『饗宴』

手始めに、プラトン対話篇において、アルキビアデスがどのように描写されているのかをアルキビアデスの演説の場面を中心に分析していく。

『饗宴』はアガトンが自作の悲劇で初めて賞を獲った際の祝宴の場が舞台となっており、招待者たちが愛の神エロースに捧げる賛歌を歌うことを試みることから対話が展開される。この祝宴は紀元前 346 年のシケリア遠征が提言される直前に催されたものをモデルとしており、アルキビアデスはすでに成人となり、放蕩とした生活を送っていた頃の姿で登場している<sup>16)</sup>。既にソクラテスからは離反しており、かつてソクラテスの内面の美を見たときと豪語する一方で、「美」についての認識がソクラテスとは食い違っている

など、矛盾した点を持つ人物として描かれている。

『饗宴』前半で、主催者のアガトンは神話や詩の引用を連ね、恋の神こそ、もっとも美しく最上の存在であるとした<sup>17)</sup>。これに対し、ソクラテスはアガトンの礼賛をゴルギアス的であると批判し<sup>18)</sup>、真の讃歌とは、言葉を華美に飾り立てるのではなく、対象の本質について語るものと定義した上で、アガトンとの対話という形でエロースがどのような存在であるのかを示すことを試みる。この対話を経て、エロースはそれ自体は美しくもなく、知恵も無いような存在であり、自身にはない美しさや知識を求める者と神との間の仲介者であることが示される。ソクラテスのこの結論に、参加者のほとんどが拍手を送るなかで、アルキビアデスは泥酔した状態で宴に乱入する。そして、先のソクラテスによる「恋」の話の嘘と断じた上で、ソクラテスの賛歌を歌い始める。

本作の時点で、アルキビアデスは既にソクラテスから距離を取っており、宴の席にソクラテスがいることに気がつくや自分を待ち伏せていたのかと驚愕する。一方でソクラテスは、アルキビアデスの嫉妬のために、美しい者との対話もままならないとこぼしている<sup>19)</sup>。

ソクラテスがアルキビアデスの行く先々に現れていることは、後述する『アルキビアデス I』や、『プロタゴラス』でも言及されている。本作『饗宴』においても類同した言及をアルキビアデスが行なっている反面、ソクラテスもまたアルキビアデスに執着を持たれていたことが示されている。本作におけるアルキビアデスの大きな特徴として、「美」についての認識がソクラテスと食い違っていることが挙げられる。アルキビアデスは、「美」を外面的なものとしての意味で捉えていることが、各所で示されている。宴に乱入し、ソクラテスと再会した際、アルキビアデスは彼を、「ここにいる者達の中で最も美しい者の側に席を見つけた」と評するが<sup>20)</sup>、この時アルキビアデスによって「最も美しい」と名指されているのは、美少年である主催者のアガトンである。アルキビアデスはソクラテスが自身の外面的美しさに恋していると考え、あらゆる場面で誘惑を試みたことを語る<sup>21)</sup>。しかし、ソクラテスはどのような状況においても、また、どのような誘惑をしても自分に触れることすらせず、話せば自身の至らなさを自覚させてく

るため、ソクラテスを避けるようになったのだと語る<sup>22)</sup>。ソクラテスにとって「美」とはプラトン対話篇で度々取り上げられる、「善」や「徳」と同一とみなされる真実在であり、「智」とも定義される概念である。ソクラテスは「美」を哲学者、あるいは求智者が探求すべきものという意味で用いている<sup>23)</sup>。しかし、アルキビアデスは「美」を外面的なものとして捉えている。アルキビアデスは宴に乱入した際、頭に大量のリボンと花冠とを乗せており、自身が頭に結んだリボンを「最も美しく賢い者に与える」ために訪ねてきたと宣言する。そして、アガトンの隣に座って、彼の頭にリボンを巻く<sup>24)</sup>。この際、アガトンのすぐ隣にはソクラテスが座っているのであるが、アルキビアデスは垂れたリボンで顔が覆われ、顔を上げるまでソクラテスの存在には気がつかない。この描写は、アルキビアデスが目に見える報償（リボン）に目を覆われ、真に求めるべきものに気がつくことができないことを暗に示している<sup>25)</sup>。このように、アルキビアデスとソクラテスは、「美」について異なる認識を持っている。しかしその一方で、アルキビアデスは自分こそ、ソクラテスの内面的美を目にしたことがある者であると強調する。ソクラテスへの讃歌の中でアルキビアデスはソクラテスのサテュロスのような外面や日常的な奇行について挙げ連ねた反面、かつて彼はこうした外面とは裏腹な彼の内面の非常に神々しく黄金のような、限りなく美しく、かつ驚嘆すべきものを見たと言語<sup>26)</sup>。彼は「内なる諸像」を見た者が果たして自身のほかにあるかどうかは分からないとした上で、「自分が」既にソクラテスのこうした内面を知っていたのだということを人称代名詞 *ἐγώ* を用いて強調する。この強調には、ソクラテスの内面的な美しさに気がついているのは己のみであるという自負が主張されている。

かつてソクラテスの内面に宿る美しさを目にしたにも関わらず、現状アルキビアデスは、リボンを巻く場面やソクラテスへの発言で見られるように、外面的な美を優先している。この矛盾は何を表しているのか。

「恋」を議題とした対話篇において、師の死の遠因ともなった人物にこのような告白をさせた意図については議論の余地があるだろう。森は、「美」に恋すること、すなわち智という美しいものを追求めるその欲求こそがエロースであるということについて語った後に、優れた魂を持ちながら墮

落した人物が登場することで<sup>27)</sup>、ソクラテスの弁護を図るのと同時に、『国家』でプラトンが述べるところの、優れた性質であるが故に、智慧を愛する素養のある人物が悪い滋養を受けて、寧ろ智から遠ざかるその様を示しているのではないかと指摘している<sup>28)</sup>。アルキビアデスの矛盾は、まさに「悪い滋養」によって、「智」を求めること、即ち「恋」から遠ざかっている様を示しているのではないか。

こうしたアルキビアデスの反面教師的な役割は、ソクラテスの側でもともに智を探求している者がいることでより強調されている。ソクラテスに誘われて宴に参加していたソクラテスの弟子の一人アリストデモスである。彼は著書を記した記録はなく、『饗宴』においてもエロースについて彼が語った内容は記憶されていない。しかし、アルキビアデスと彼の間には、幾つかの対比構造が見られる。『饗宴』冒頭でソクラテスとアリストデモスが出会ったとき、ソクラテスはアガトン (Ἀγάθων) と良いこと (ἀγαθοί) の形容詞をかけて、「アガトンの宴に行けるのは善き者だけである」と話してアリストデモスを誘う<sup>29)</sup>。この誘いを受け、アリストデモスは宴に参加することになるが、このときアリストデモスは、自分はそのような人間でないと否定する。この一方でアルキビアデスは、誰に招かれた訳でもなく、アガトンの噂を聞きつけて呼ばれていない宴に乱入しており、自らをソクラテスについて良く知る人物として驕っている様子を見せる。この点から、両者には自己認識の有無の差が見出される。ソクラテスがアガトンとの対話で示したように、エロースの徒、すなわち「智」という美しいものを求める人間は、自らに具わっていない要素を求める。しかし、そのためには自らに何が足りていないのかを知っている必要がある。しかし、見目が元々美しく、あらゆる美点を備えていたアルキビアデスはこの前提をわきまえておらず、その時点でエロースの徒にはなりえない。一方アリストデモスはソクラテスの最も親しい弟子のひとりであり、彼の死後は最も泣き崩れたと語られており<sup>30)</sup>、ソクラテスの元から早々に離れたアルキビアデスとの点でも対立している。

『饗宴』におけるアルキビアデスの自尊心は、度々着目され、Gribbleは、アルキビアデスはその裕福さの故に哲学的思考の面で劣っていることに気

づいていない、即ち自身に対する不知を内包している状態であり、それによ来した驕りが散見されると指摘する<sup>31)</sup>。アルキビアデスはこの賛歌の後に、ソクラテスに隣に座ることを拒まれ、宴の最後にはアリストデモスはソクラテスに付き従ってその場を去る。『饗宴』におけるアルキビアデスは、外面的美や報償に目を奪われた「驕り」の性質を持った青年として描かれ、智を愛し探求することの反面教師としての役割をもっているということができらる。

エロースの徒に、真に「智」という美しいものを求める者に必要であるのは、自身が何かにおいて欠けているという自覚である。それは自己に何ができ、また何ができないのかという自己認識が必要不可欠なのであるが、アルキビアデスは目先の美しさや報償に目を奪われ、自身に対して知することを怠っている。こうした描写は、彼が自己認識を欠かした人物として描写されていることを示している。

### 3. 『プロタゴラス』

『饗宴』では反面教師的役割を伴って対話に登場していたアルキビアデスであるが、『プロタゴラス』においては一転、ソクラテスに熱を上げる青年として対話に参加し、発言は僅かであるものの、ソクラテスの対話の補助を行う。

対話篇におけるアルキビアデスを研究するにあたっては、本作は除外されることが多い。Dittmar は本作におけるアルキビアデスを、単なる「爽やかな青年のモチーフ」とみなし、『アルキビアデス I』、『アルキビアデス II』、及び『饗宴』を通して、ソクラテスとアルキビアデスの関係の変化が示されていることを指摘した Helfer も、本作は検討から省いている<sup>32)</sup>。しかし、対話の冒頭における友人とソクラテスの会話でアルキビアデスが引き合いに出されることからプロタゴラスとの対話の回想が始まる点、僅少な出番においてでも、『饗宴』で見られたのと類似した驕りが見出される点は十分に検討に値すると考えられた。

数々のプラトン対話篇で共通して見られるように、本作も友人との会話

を起点とした回想の形で展開される。また、ペリクレスの息子たちが存命であることから、本対話篇は紀元前 433 年のプロタゴラスの 2 回目の訪問をモデルとしていると考えられ、アルキビアデスは『饗宴』のときよりも若い時分であると推定できる。友人がアルキビアデスについて美しさの盛りはすでに過ぎていると評するのに対し<sup>33)</sup>、ソクラテスは今の時期こそ美しい青春の盛りであると評価しながら、より美しい存在としてプロタゴラスを提示する<sup>34)</sup>。このやりとりは対話に入る前の前座であり、『饗宴』や『パイドロス』において言及されたソクラテスの「美」の捉え方が再度示されている場でもある。ソクラテスにとっての「美」とは、見た目の美しさのような外面的なものではなく、寧ろ「智」のような不可視の真実在のことを示す。『プロタゴラス』冒頭におけるこのやりとりでは、ソクラテスにとっての「美」が再提示されると共に、プロタゴラスが、ソクラテスによって、アルキビアデスを凌いで美しいと評されている由縁が、彼が持つ「智」であるということをも暗に示している。

「徳」は教示で得ることが可能であるかという問いからプロタゴラスとソクラテスは対話を始める。両者の見解がそれぞれ提示された後、ソクラテスは自分に合せて手短かに答えて欲しいとプロタゴラスに要求するが、プロタゴラスはこれを洩る。これを受けてソクラテスは、また話す気になったら対話の続きをしようと対話の場を後にしようとする。しかし、家主のカリアスがこれを引き留め<sup>35)</sup>、両者が好きな方式を用いて対話を行えば良いと提案する。このカリアスの発言に対し、アルキビアデスは本対話篇で初めて口を開く。冒頭の友人との会話でソクラテスのはの様子を友人に尋ねられた際、自分のために色々と弁じてくれた<sup>36)</sup>、と回想している。前述したようにアルキビアデスは、本作の対話ではほとんど発言することはない。しかし、この長台詞によって、彼はソクラテスの一問一答の対話方式についての説明を行い、この方式に従って談論するようにとプロタゴラスに促す<sup>37)</sup>。

この台詞以降は、アルキビアデスはカリアスがソクラテスとプロタゴラスの対話に挟まろうとするのを諫めたほかに出番を持たない。このため、本対話篇におけるアルキビアデスは、役割が他の対話篇と比較すると希薄で

あることは間違いない<sup>38)</sup>。しかし、その僅かな登場場面においても、『饗宴』で見られたようなソクラテスのことは自身がよく知っているという自負を読み取ることができるのである。336Bにおける、唯一の出番といえる長台詞において、アルキビアデスは、ソクラテスについて応答と質問での対話の能力がプロタゴラスより優れていること、また、話した内容は忘れるような人でないことを説明する。アルキビアデスはソクラテスが、本人が自負しているほど忘れっぽくないことを「自分が」保証する旨を述べており、このとき *Σωκράτη γε ἐγὼ ἐγγυῶμαι* と『饗宴』216Aで見られたのと同じように、*ἐγὼ* を用いた強調の表現によって「自分がソクラテスについて保証している」ことを示している。出番の僅かな本作においても、ソクラテスを良く知る者であるという自負が示すのである。ただしアルキビアデスのこの台詞に対するクリティアスの、アルキビアデスは熱を上げているものについていつも負けん気を出すという発言は<sup>40)</sup>、本作におけるアルキビアデスが、ソクラテスに熱を上げていることを示唆しており、この点は『饗宴』におけるアルキビアデスとは対照的である。

さらにクリティアスは、対話に調停役を置くことを進言し、これに同意した聴衆の内、ヒッピアスがソクラテスには短く区切って言葉をやりとりする手法をやめ、言論が堂々として優美な姿を聴衆に見せられるようにする事を要求し、一方プロタゴラスには言論の海原遠く離れて陸地を見失うことのないようにと忠告を行う<sup>41)</sup>。自らを含めた館に集っている人々のことを事物の本性を知りながら、ギリシア人中最高の知者であると呼称する。この発言に聴衆達が拍手を送っていることから、本作に聴衆として登場するソフィストたちが自らを知者であるといつて憚らないことが明らかになる<sup>42)</sup>。

『プロタゴラス』でソクラテス達の対話の聴衆となっている人々の多くはソフィストに該当する。ヒッピアスの発言は、ソクラテスとソフィストたちとの「知る」こととの感覚の違いを浮き彫りにしている。ヒッピアスは、自らを含めた館に集う人々を知者とした上で、自分たちは「事物の本性を知る」者であると標榜している。また、言論がもっと堂々として優美な姿を聴衆に見せられるように…と頼んでいるところから、彼もまた『饗宴』の

アガトンのように言葉を飾って物事を賛美することをよしとする人物の1人である。プロタゴラスとソクラテスが対話を始めるきっかけとなった、ソクラテスの友人であるヒポクラテスが持ちかけた、プロタゴラスの元で教わりに行くべきであるかどうか、という相談に答えた際ソクラテスは魂の世話を他者に任せることの危険性について語り、ソフィスト達について、自身が扱うものについてそのどれが魂に有益であり、また有害であるのかを知らないままに全ての商品を褒めたてるような人物がいることを警告している<sup>43)</sup>。まさにヒッピアスのこの発言は、この場に集結しているソフィスト達こそ、ソクラテスが危惧する、魂の世話を委ねるべきでないものとして挙げた、自らが何を売っていて、またその売っているものが何に役立つのかを知らない連中であることを指している<sup>44)</sup>。ソクラテスに自身は何を教えることができるのかという問いに対して答えることができたプロタゴラスは、少なくとも自身が教えるものは社会で生きる術であることを知っていたといえる。冒頭においてソクラテスに「最高の知」と評されたのは、こうした人々と比較してのことだろう。実際、監督役が必要であるというヒッピアスのこの提言に対し、ソクラテスは、監督役は最も秀でた人間がしなければならないが、今この中では、自分と対話しているプロタゴラスが最高の知者である故、監督役にふさわしい人物はいないと返している。

立場こそ、『饗宴』とは対照的に見える本作のアルキビアデスであるが、彼もまた、無自覚にこの標榜に類した振る舞いをしている人物の1人である。本作における彼は、クリティアスに言われるように、ソクラテスに熱を上げ、彼の言うことを正しいと確信している。しかしこの確信の裏には、『饗宴』で見られたのと類同した、ソクラテスのことを自分は良く知っているという自負が垣間見えるのである。

また、出番が僅少であるのに冒頭で引き合いに出されていることそのものが、アルキビアデスとソクラテスの関係の変化を暗に示す描写と捉えることができるのではないか。冒頭の友人との会話の際、ソクラテスは友人にアルキビアデスの状態について尋ねられ、「今日のところは良い」と評しながらも、今回の対話では、彼の方にちっとも気を取られなかったことを明かす。このソクラテスの発言と、対話中におけるアルキビアデスの、ソ

クラテスに熱を上げていながら、聴衆であるソフィスト達と同じような標榜を行っている態度とを踏まえると、本対話篇において、ソクラテスがアルキビアデスに関心を持たなかった理由、それは、彼が他の聴衆の中に埋没しつつあったからなのではないか。さらなる検討を必要とするが、こうしたことから、『プロタゴラス』におけるアルキビアデスもまた、驕りを内包した人物として描かれていると考えられた。

#### 4. 『アルキビアデス I』—アイスキネスとの比較

『アルキビアデス I』の構成や他のプラトン対話篇の諸哲学との関係について論じる際、たびたびアイスキネスによる対話篇『アルキビアデス』とクセノフォンの『ソクラテスの思い出』は比較対象として引用される。例えば Dittmar は、これら 3 名の作品の物語構造の相関性を指摘し<sup>45)</sup>、Effe はプラトン『アルキビアデス I』がアイスキネスから影響を受けている可能性を示した<sup>46)</sup>。アイスキネス『アルキビアデス』は、断片として現存しており、対話篇のあらすじの概ねを把握することはできるものの、全体の構成を見ることは不可能である。このため、本章では『アルキビアデス I』と、判明している範囲においてのアイスキネス『アルキビアデス』との大筋を比較を試みる。

前述したように『アルキビアデス I』、アイスキネス版『アルキビアデス』のどちらも、ソクラテスが対話を通してアルキビアデスに自身の無知を自覚させることを試みる大筋は同様だが、その説得の手法は異なっている。アイスキネス版においてソクラテスは、先達の功績を示す方法を採用する。

アイスキネス版『アルキビアデス』は断片であるため、明白に順序を付けることは困難であるが、テμισトクレスに嫉妬し、自身は彼と同等かそれ以上の存在であると信じてテμισトクレスの批判を行うアルキビアデスに対し<sup>47)</sup>、ソクラテスがテμισトクレスの功績を挙げ連ね、彼の準備がテμισトクレスに遠く及ばないことを示すまでの大筋が判明している<sup>48)</sup>。現存する断片の中で最も長い Aelius Alistides による断片では、本対話篇の一部分の 62 行が記されているが、この 62 行の内 52 行で、ソクラテスはテミス

トクレスの人格についての演説を行っている<sup>49)</sup>。この演説を通してソクラテスは、テミストクレスのリーダーとしての偉大さが徳への熱心さ(σπουδαιότης ἐν ἀρετῇ)と知識(ἐπιστήμη)にあったこと、そして、その成功は、幸運(τύχη)にではなく、知識(ἐπιστήμη)と自己に配慮すること(ἐπιμέλεια ἑαυτοῦ)にあったことをアルキビアデスに言明する<sup>50)</sup>。そして、そうしたテミストクレスの技量ですら民会における彼の失墜を食い止めることはできなかったとした上で、アルキビアデスに自身について気を配る人が誰一人としていない愚かさについて何か思うことはないかと尋ねる<sup>51)</sup>。

このようにソクラテスはテミストクレスという具体例を示しながら、自分が過去の政治家と並ぶほどの価値を持つかをアルキビアデスに問い、彼に自身がテミストクレスに及ぶ存在ではないことの自覚を促すことで、自己を気遣う事の必要性に気づかせる。対話を通してテミストクレスに及ばない事を理解したアルキビアデスは涙を流してしゃがみ込み<sup>52)</sup>、ソクラテスは自分がアルキビアデスにいかなる益をもたらしたかを語り始める<sup>53)</sup>。この際ソクラテスは、「もし私が何らかの技術によって彼を益することができると思ったのなら、全くもって私の多大なる愚かさを述べることになっただろう。しかし今や、アルキビアデスに関してこのことが神の運命によって私に与えられたと思われる。」と語る<sup>54)</sup>。ソクラテスが自身には何らかの技術についての知識は備わっていないと自負していることは、プラトン対話篇におけるソクラテスと共通している。しかし、アルキビアデスに無知を自覚させる手段として、彼が嫉妬する偉人の功績をあげ連ねることを選択しているのはプラトン対話篇との大きな違いである。

『アルキビアデス I』におけるソクラテスは、アルキビアデスを説得する手段として一問一答の対話の形式を用いる。冒頭で対話を始める前にソクラテスは、なぜ自分がアルキビアデスが成人するまで対話を持ちかけなかったのか、その理由を語る。曰く、それはダイモーンなるものに彼に接触することを妨げられていたためであり、ダイモーンが制止をしなくなったため、こうして対話を持ちかけたのだと語る。アイスキネス版と同じく、『アルキビアデス I』においても、アルキビアデスは将来政界で名を馳せることを望む青年として描かれる。本作のアルキビアデスはソクラテスによる

と、もうじき民会で政治家として発言を行う事ができるようになる年齢であり<sup>55)</sup>、この民会でペリクレスも他の者も、これまでの人は誰一人及ばないほどに自身が高い名誉を持って報いられなければならない人物であることをアテナイ人に見せてやろうと考えていることをソクラテスは指摘する<sup>56)</sup>。そして、その野望を叶えるためには自身の力が必要不可欠であると、民会の場で何について話そうとしているのかを問うことから対話が始まる。

アルキビアデスは当初、自身が他の人より優れているのは戦争や平和のことなど、国家に関わるものについてであると自負していたが、対話を通して徐々に自身の無知に気づかされることとなる。そして対話篇終盤、己の無知を自覚したアルキビアデスは、これからはソクラテスに従う者としてついていくことを宣言する<sup>57)</sup>。『アルキビアデス I』、アイスキネス版『アルキビアデス』の両方でアルキビアデスは、ソクラテスによって己の無知を自覚させられる。ただし、アイスキネス版では強さを挫かれ落涙する一方、プラトン対話篇では、無知を認めソクラテスの追従者になることを宣言する。この結末の差異は大きなものである。加えて、プラトン対話篇において、特徴的であるのが、アルキビアデスの宣言の後で、ソクラテスはその将来について懸念を示していることである。ソクラテスは、今や彼がアテナイ人の民衆によって墮落させられ、より醜くなることがなければ彼を見捨てることはないとするが<sup>58)</sup>、この際「墮落させられ」の意で用いられる動詞 *διαφθορῆς* は、『弁明』でソクラテスの罪状のひとつとされる「青年を墮落させた」罪でも用いられている。『弁明』においてソクラテスに向けられた罪状を、アルキビアデスが周囲の人々によって墮落させられた、というように逆転させているという指摘もあるが<sup>59)</sup>、実際アルキビアデスの後の行動が師であるソクラテスの死の遠因となったことと無関係ではないだろう<sup>60)</sup>。アルキビアデスの波乱に満ちた未来を示唆する描写である。ソクラテスによってアルキビアデスの将来が懸念されている箇所は、この場面に限らない。対話篇終盤においてソクラテスはアルキビアデスの宣言に対して、もし君のところで愛の翼を孵し、今度は君のそれによって付き添われるのならば、と返す<sup>61)</sup>。「愛の翼」は『パイドロス』に登場する概念で

あるが<sup>62)</sup>これを踏まえるとその場面でソクラテスはアルキビアデスを愛者にするのを望んでいると読み取れる<sup>63)</sup>。しかし、続く言葉でソクラテスは都市の強さを見ていると自身もアルキビアデスも都市の力に負けてしまうのではないかと危惧を表明し<sup>64)</sup>、対話篇は終わる。このように、『アルキビアデス I』におけるソクラテスは、対話を通してソクラテスに付いていくことを誓ったアルキビアデスに対し、そのことを歓迎しつつも、これ以上醜くなることがなければ、と条件を付け加えたり、彼が将来都市の力に負けてしまうのではないかと危惧を示したりと、未来を案じる言動を度々行っている。ソクラテスのこうした発言は、本作におけるアルキビアデスの未来が『饗宴』で見られたような墮落したものであることを暗喩しているのではないかと危惧する終盤の発言は、都市の人々によって自分が告発される未来をも示唆しているのではないかと。

Dittmar や Effe に指摘されるように、アイスキネス版『アルキビアデス』、『アルキビアデス I』の2作品は、青年に自らに配慮すること、すなわち自己認識を学ばせるという大筋や、アルキビアデスを政界で活躍することを目論んでいる青年として描いていることは共通している。しかし、『アルキビアデス I』は、アイスキネス版よりもアルキビアデス本人を対話篇の話し相手として仔細に描きこんでいる一方で、アイスキネス版はアルキビアデスを、単に政治に関心を持つ青年というモチーフのために配役している。この差異が顕著に見られるのが、例示される政治家である。アルキビアデスが、自身がより優れていると思い込んでいる政治家として、『アルキビアデス I』においては、彼の後見人であり、対話編内の時間ではアテナイのリーダー的存在であるペリクレスが提示されている一方<sup>65)</sup>、アイスキネス版ではテミストクレスを提示する<sup>66)</sup>。両作品で提示された政治家のうち、ペリクレスはアルキビアデスにとってより近い人物である。『ソクラテスの思い出』によると、アルキビアデスは、ペリクレスに対話を持ちかけ、自分がペリクレスより勝ったと確信したことからソクラテスの元に通うことをやめた<sup>67)</sup>。このことを踏まえると、『アルキビアデス I』は、アルキビアデスにとってより近しく有力な人物を例として採択していると考えられる。

一方、アイスキネス版で例示されるテミストクレスもまた、当時のアテナイでもよく知られた名君であったが、前5世紀のペルシア戦争の時に活躍した政治家であり、アルキビアデスとは時代に関きがある。この点から、アイスキネス版は、アルキビアデス本人に注目しているというよりは寧ろ、政治に関心を持つ若者の典型として描写していると考えられた。加えて、『アルキビアデス I』は彼の幼少期の逸話やその家柄などに触れ、そうした生い立ちと現状の無知が結び付けられていることと比較すると、アイスキネス版におけるアルキビアデス自身の描写は希薄である。寧ろ、ひとりの傲慢な青年のモデルケースとしてアルキビアデスを扱っている可能性がある。

『アルキビアデス I』とアイスキネス版『アルキビアデス』のうち、どちらが先に記されたかを知る術は乏しく、プラトンのほうがアイスキネスの影響を受けているという指摘もあるが<sup>68)</sup>、いずれにしても『アルキビアデス I』におけるアルキビアデスの改心とソクラテスへの宣言、それに対するソクラテスの懸念の場面は、プラトンないしこの対話篇の著者によって加えられたものであることは明白である。

## 5. クセノフォン

これまでの検討で示されたように、プラトンは、アルキビアデスとソクラテスの関係を、いずれの対話篇においても言及していた。対話篇においてアルキビアデスは、時に反面教師として、ソクラテスに熱を上げる者として登場し、主要話者となる『アルキビアデス I』では、ソクラテスに出会い薫陶を受ける様が描かれる。このように様々な時系列でソクラテスとの関係が示されてきた。

プラトン、アイスキネスと同じく、ソクラテスの弟子であったクセノフォンも、アルキビアデスについて度々言及するが、ソクラテスと彼との関係についての見解は、プラトンのそれとは対照的である。その所以に、著作『ソクラテスの思い出』は、ソクラテスの擁護が強く意図されていることがある。クセノフォンの、『ソクラテスの思い出』におけるソクラテスへの擁

護の意図は、冒頭のソクラテスの告発内容に疑問を呈する一文からも明白である<sup>69)</sup>。『ソクラテス思い出』は、全4巻に渡ってソクラテスが如何なる益を都市にもたらしたかを対話の回想を交えて示すが、この手法にはソクラテスの罪状として挙げられている「青年を墮落させた罪」への対抗が垣間見える。では、クセノフォンは、アルキビアデスをどのように評価しているか。アルキビアデスは、第1巻の1章から、同じくソクラテスについていたクリティアス<sup>70)</sup>と並べて「都市に無限の害を及ぼした」として批難する<sup>71)</sup>。そして、彼らの行い全ての責任をソクラテスが負うべきではないことを主張する<sup>72)</sup>。また、同章でアルキビアデスとクリティアスについて、アテナイの中でも特に名誉欲が強く、すべてが自分たちの手で行われなければ気が済まない性分であったと評する。アルキビアデスのこの性分は、プラトン対話篇においても類同した傾向が見られ、『アルキビアデスI』ではソクラテスによってその気位の強さによって求愛者は彼の元を去って行ったと語られ<sup>73)</sup>、『プロタゴラス』ではクリティアスによって自分が熱を上げているものが勝たなければ我慢がならないと評されている<sup>74)</sup>。性分についての見解はプラトンと類同しているものの、クセノフォンはプラトン対話篇で描かれているようなアルキビアデスとソクラテスの関係性については否定的である。『ソクラテスの思い出』では、アルキビアデスたちはソクラテスから、談話を通して周囲の人間を思うままに引き回す力、すなわち「ものを言い、ことを行う」技術を学びに来たに過ぎないと見なされており、ソクラテスが思うような親愛の情はなかったと断言する<sup>75)</sup>。この違いは何に由来するのか。

プラトンとクセノフォンは教育の必要性についても類似した見解を持っている。プラトン対話篇『国家』第5巻にてソクラテスが、訓練を積まなければどんなに優良な素質を持った魂であっても凡庸な存在に成り下がることを述べているが<sup>76)</sup>、クセノフォンもまた、第四巻におけるソクラテスに師事したことで益を得た人物達について語る章において、いかに優秀な馬や犬でも訓練せずにおかれたならその性質を台無しにする、というたとえ話を行っている<sup>77)</sup>。優良なものも、訓練を怠れば台無しになるという見解は両者で一致しているが、墮落する原因をその人自身と、その周囲のど

ちらに見出すかが両者の決定的な違いである。アテナイ有数の裕福な一族に生まれ、容姿、知性に優れたアルキビアデスが都市に害をもたらしたことについて、クセノフォンは、彼自身が自身の高慢な性質を抑えなかったことに由来しているとみなした一方、プラトンは彼の境遇とその周囲の人々から、彼の墮落の原因を見出した。その差が、ソクラテスとアルキビアデスの関係についての見解に表れているのではないか。

師を同じくするアイスキネス、クセノフォン、プラトンは共通してアルキビアデスについて言及をしている。しかし、アイスキネスは単なるモチーフとして、クセノフォンは批判の対象としてアルキビアデスを単一に扱っているのに対し、プラトンはあらゆる段階の彼を対話篇に登場させているという大きな違いがあった。このような描写をされるアルキビアデスが、対話篇でもつ役割とは何であるか。次章で考察していく。

## 6. アルキビアデスは自己認識と結びついているのか

プラトン対話篇『饗宴』『プロタゴラス』、『アルキビアデスⅠ』におけるアルキビアデスは、登場する立場や年齢は各作品で異なっているものの、ソクラテスとの関係が示されること、また、常に自己への認識、すなわち何が自身に必要であるかの認識が欠如している状態で描かれていることが共通していた。これまでの検討を順に振り返る。『饗宴』においてアルキビアデスはソクラテスの唱える智恵を愛し求める者としてのエロースの徒の反面教師として登場し、ソクラテスについて自身はよく知る者であることを自負する一方で、「美」の認識はソクラテスのそれと食い違っており、外面的な美に目を奪われている状態が描かれていた。次に、『プロタゴラス』においては、『饗宴』とは対照的にソクラテスに熱を上げる青年として登場し<sup>78)</sup>、ソクラテスの対話の補助を行う一方で『饗宴』でも見られたソクラテスについて最もよく知るのは自分であるという自負が示される。また、ソクラテスが彼に関心を持たないことから、関係の変化が示唆されていると考えられた。『アルキビアデスⅠ』においては、まもなく成人する時分の姿で登場する<sup>79)</sup>。政界で活躍する大望を持つ彼が、ソクラテスとの対話を通

してそのために必要な要素を欠いていることを認めることが対話篇の大筋となっている。対話の末にアルキビアデスは無知を認め、ソクラテスに追従することを誓うが、対話を始める冒頭からソクラテスは彼の自尊心の高さについて言及し、将来を危惧する。このように、アルキビアデスは登場する3つの作品で、ソクラテスから離反した後の姿、彼に熱を上げている姿、そして対話を通して無知に気づかされる若者としての姿がそれぞれ描写されていた。そして、共通して自己認識の欠如に由来する驕りを有していた。

前述したように、プラトン対話篇は題材に適した人物・時間・舞台を設定する傾向がある。しかし、特定の議題と結びついて登場する人物たちは、必ずしもその概念について心得があるわけではないのではないか。アルキビアデスと同じく複数の作品に登場する人物としてパイドロスを例示したが、パイドロスは「恋」について、世俗的、ソフィスト的理解しか持ち合わせてはいなかった<sup>80)</sup>。アルキビアデスもまた、自己を配慮することを欠かしているために、悪い意味で引き合いにだされているのではないか。自己認識、自身を知ることはプラトン対話篇では重要な前提の一つである。各作品におけるアルキビアデスの描写は、自己認識というテーマそのものというよりも、それを妨げる原因となる自尊心に焦点が当てられていると考えられる。自尊心の高さのゆえに無知を認めず、政界で多くの害を及ぼし、やがて破滅していったアルキビアデスは、自己認識の必要性を示すために最適な人物だったのではないか。

## 7. 結びに

アイスキネス、クセノフォン、プラトンによる各作品におけるアルキビアデスについてこれまで検討し、3人の著者はいずれも彼を自尊心が高く、驕った人物として描写していることが明らかとなった。そして、プラトンは他の2名とソクラテスとの関係についての見解が異なっていることが示されたが、加えてもう1つ、3名には決定的な違いがある。それは、アルキビアデスの自尊心の由来に着目している点である。本稿の終わりに、対話

篇『国家』第5巻の記述がアルキビアデス描写の補強となっていることを示したい。

『国家』第4巻では、国家を牽引するのに如何なる人物がふさわしいかということについて対話が行われ、哲学者こそが国家を主導すべきであるという結論が導き出された。第5巻ではこの結論を踏まえ、哲学者が持つべき自然的素質とは何であるかについて対話が展開される。そして、哲学者が持つ自然的素質として、記憶力の良さと生まれつき度を守り、優雅さを備えた精神が必要であることが導き出された<sup>81)</sup>。そうした人々こそ教育を積み、国を委ねるのにふさわしい人物となるのだとソクラテスは語り、続いてそのような哲学に必要な素質を持っているはずの人物が如何にしてその素質を損なってしまうのかということについて、対話は移行していく。ソクラテスは、素質を損なう原因は数多くあれども、とりわけ美点であるはずの家の裕福さが哲学的素質を損なってしまうとし<sup>82)</sup>、「大国の生まれで、富と家柄に恵まれ、しかも堂々たる美丈夫」をその例としてあげる<sup>83)</sup>。この条件は、まさに『アルキビアデスⅠ』においてソクラテスが提示するアルキビアデスの境遇と一致している。そして、そのような人物の身内や同国民が、彼にひれ伏しへつらうことしかしないため、やがて彼はギリシア人に関することでも、異邦人に関することでも処理してやっていけると信じ込んで計り知れぬ野望に満たされることになり<sup>84)</sup>、知性を欠いたままもったいぶった態度とむなしい自尊心とに満たされ、思い上がって高慢な人間になってしまうのだと解説する<sup>85)</sup>。この「自尊心」は、『アルキビアデスⅠ』で、まさにソクラテス以外の彼への求愛者が彼の元を去って行った原因に他ならない<sup>86)</sup>。このように、『国家』第5巻における対話には、『アルキビアデスⅠ』の内容と対応している箇所が見受けられる。アルキビアデスは、その全てのことが自分の手で行われなければ気が済まない性分からソクラテスの元を離れ、政界に身を投じていった。クセノフォンはその顛末を彼自身の性質に由来するものとして批判的に言及し、アイスキネスは政界に関心を持つ驕った青年のモチーフとして彼を用いた。しかし『国家』第5巻の対話で見られるように、プラトンは優良な魂がその優良さを失う所以をその人自身にではなく、周囲にいる人物に見出していた。対話篇におい

て、アルキビアデスは常に世俗、或いは都市と結びついて登場している。『饗宴』では世俗の意味での報償を沢山付けた状態で宴席に現れ、『プロタゴラス』ではソフィストの集いに参加している。『アルキビアデス I』においてはソクラテスと 1 対 1 で対話を行い、自身の無知を知ることになるが、都市の力に敗北することをソクラテスは危惧している。このような登場の仕方は、自尊心の高い人物として彼を描写すると共に、家柄の良い優良なはずの若者を周囲の人間が墮落させてしまっているという、都市の人々への批判も含んでいるのではないか。こうした主張は、『弁論』におけるソクラテスの「青年を墮落させた」罪状を逆転させるものである。アルキビアデスの描写には、自尊心を育ててしまうのは周囲の人間であるというプラトンの主張を示しているのではないか。

『国家』の執筆と並行してプラトンは、アカデメイアの創立・運営を行っていたと推測されるが<sup>87)</sup>、次世代の若者を教育するに当たって、墮落を招く自尊心をまず取り払い、自身に可能なこと、また、不可能であることをわきまえさせること、すなわち自己認識は重要であったのではないか。自尊心を糺すことなく身の破滅を招いたアルキビアデスは、自己を知ることの必要性を示すための反面教師として最適な人選であっても不思議ではない。アルキビアデスの究極的な役割は、過剰な自尊心を持った結果を描くことで、「汝自身を知ること」を伝えることであつたのではないか。

本稿では、アルキビアデスが登場する対話篇各種の分析と、他のソクラテスの弟子達の著作との比較によって、プラトン対話篇において彼が持つ役割について検討し、そうした描写を行った意図について、プラトンのアカデメイア運営時期と関連付けて考察を試みた。

プラトンの人物描写の特異性についてさらに探求すべく、アルキビアデスと同様な描写をされている人物がいるかの確認と、アルキビアデスが、各対話篇に、なぜその姿で登場しているのかということについてのさらなる検討を重ねていく所存である。

## 注

- 1) 上記の他には『ヒッパルコス (小)』、『恋がたき』、『テアゲス』、『ミノス』などが挙げられる。
- 2) 例としては『歴史』、『モラリア』、『英雄伝』など。
- 3) 『英雄伝』 14-1-12、翻訳は柳沼 (2007)、pp. 130-132。
- 4) 『ソクラテスの思い出』 1-1-12-15。
- 5) Denyer (2001)、pp. 2-3。
- 6) 『プラトン哲学入門』 149-30-150。
- 7) Schleiermacher (1836)、328-336、及び Denyer (2001)、p. 15。
- 8) Dittmar (1912)、pp. 165-166。
- 9) Heidel (1896)、p. 62。
- 10) Annas (1950)、pp. 115-136。
- 11) Moses (1950)、pp. 180-182。
- 12) Westerlink (2003)、p. 25。
- 13) この場合の知識とはソクラテスの知恵ではなく学習によって身につく方を指す。
- 14) 『饗宴』『テアイテトス』の間とする説 (田中 (1975)、pp. 217-219)、『饗宴』、『プロタゴラス』と同時期に書かれたとする説 (Hadas (1950)、pp. 132-133) など。いずれも中期に書かれたとみなされる傾向がある。
- 15) 例としては森 (1961) など。
- 16) ソクラテスから離反した後のアルキピアデスの生活については『ソクラテスの思い出』 1-2-24、『英雄伝』 16-2 などで言及される。
- 17) 『饗宴』 197C。
- 18) 『プロタゴラス』でも示されるが、アガトンはソフィストのゴルギアスの信奉者であった。
- 19) 『饗宴』 213E。
- 20) 『饗宴』 214A。
- 21) 『饗宴』 215A。
- 22) 『饗宴』 216A。
- 23) 『饗宴』 209E-212C。
- 24) 『饗宴』 215A。
- 25) 山本 (2016)、pp. 150-151。
- 26) 「かつてそれを見た」の部分には *ἐγὼ ἤδη ποτ' εἶδον* が該当。
- 27) プラトンの「優れた魂」とは、『国家』家柄が裕福で容姿も良く、あらゆる面で恵まれた人物が持つ魂のことを指す。
- 28) 森 (1961)、pp. 34-52。

- 29) プラトンは度々この言い回しを用いており、『プロタゴラス』 336B におけるアルキピアデスも、「美しい」(καλῶς) とカリアス (ἡ Καλλία) の名前をかけて言葉遊びをしている。
- 30) 『バイドン』 117B。
- 31) Gribble (1999)、pp. 216-218。
- 32) Helfer (2017)、pp. 5-6。
- 33) ひげの生え始めるころが美少年としての時期の終わりを意味していた。
- 34) 『プロタゴラス』 309C-D。
- 35) 『プロタゴラス』 335D。
- 36) 『プロタゴラス』 309B。
- 37) 『プロタゴラス』 336B-D。
- 38) Dittmar (1912)、p. 65。
- 39) 『アルキピアデス I』 104A-C。
- 40) Denyer (2008)、p. 141。
- 41) 『プロタゴラス』 337A-B。
- 42) 本稿においてはプラトン対話篇で用いられる、報酬を取る代わりに教えを授ける人々の意。クリティアスもヒッピアスもソフィストである。
- 43) 『プロタゴラス』 313C。
- 44) 『プロタゴラス』 313D-E。
- 45) Dittmar (1912)、p. 66。
- 46) Effe (1971)、pp. 198-208。
- 47) 米澤 (2001)、pp. 5-6。
- 48) Maximus of Tyre、Demetrius、Priscian、Athenaeos、Aelius Alistides によって保存された断片が残存するほか、大筋については *Cicero Tusulan Disputation* 3.77 などで簡潔に概説されている。
- 49) Berry (1950)、p. 2。
- 50) 同上。
- 51) 同上。
- 52) Dittmar (1912)、p. 272、および米澤 (2001) p. 5。
- 53) 同上。
- 54) Dittmar (1912)、pp. 272-273。
- 55) アテナイで青年は 18 歳から兵役の義務が課され、20 歳から民会での発言が許されるようになる。
- 56) 『アルキピアデス I』 105B。
- 57) 『アルキピアデス I』 135D。
- 58) 『アルキピアデス I』 132A。
- 59) Denyer (2001)、p. 226。

- 60) アルキビアデスの動向についてはトゥー・キデイデス『歴史』、クセノフォン『ギリシア史』に詳細が記載されている。
- 61) 『アルキビアデス I』 135D。
- 62) 『パイドロス』 355C-E。ソクラテスは愛者と相互で魂の世話をすることで共に恋の恩恵にあずかることができると解説している。
- 63) ここでは共に智恵を探求する仲間としての意味である。
- 64) 『アルキビアデス I』 135E。
- 65) 『アルキビアデス I』 105A-106A。
- 66) Berry (1950)、p. 2。
- 67) 『ソクラテスの思い出』、1-2-40-47。
- 68) Effe (1971)、pp. 198-208。
- 69) 『ソクラテスの思い出』、1-1。「いったい何の故にソクラテスが告発されなければならなかったのか不思議である」という書き出しから『ソクラテスの思い出』は綴られている。
- 70) 脚注 71 の箇所、クセノフォンはクリティアスについてペロポネソス戦争終結後に 30 人僭主の一人として暴虐を行ったと記している。プラトン対話篇では『カルミデス』『プロタゴラス』などに登場する他、子孫のクリティアス 4 世が『クリティアス』『ティマイオス』に登場している。
- 71) 『ソクラテスの思い出』 1-2-24。
- 72) 『ソクラテスの思い出』 1-1-12-16。
- 73) 『アルキビアデス I』 104C。
- 74) 『プロタゴラス』 336E。
- 75) 『ソクラテスの思い出』 4-2-47。
- 76) 『国家』 490E。
- 77) 『ソクラテスの思い出』 4-1-1-5。
- 78) 『プロタゴラス』 336E。
- 79) 『アルキビアデス I』 105B。
- 80) 『饗宴』で最初にエロースについての賛歌を唄うのがパイドロスである。彼はヘシオドスなどの見解を引用し、エロースは偉大なる古い神の 1 柱であるとし、その由来について述べる。一般的に理解されているようなエロス像であるともいえる。(田中 (1971)、pp. 39-416。) また、『パイドロス』においてもリュシアスの恋についての論文をソクラテスに読み聞かせており、自身での見解を持っているというよりは、詩人や傾倒しているソフィストの意見をそのまま活用している。
- 81) 『国家』 487C。
- 82) 『国家』 490E。
- 83) 『国家』 491A-D。

- 84) 同上。  
85) 同上。  
86) 『アルキビアデス I』 103B。  
87) 田中 (1979)、pp. 104-105。

## 参考文献

- アルピノス、鎌田雅年訳 (2008) 「プラトン序説—対話篇入門」、中畑正志編『プラトン哲学入門』所収、西洋古典叢書。  
オリュンピオドロス、鎌田雅年訳 (2008) 「プラトンの生涯」、中畑正志編『プラトン哲学入門』所収、西洋古典叢書。  
加藤信朗 (1988) 『初期プラトン哲学』、東京大学出版会。  
クセノフォン、佐々木理訳 (1974) 『ソクラテスの思い出』、岩波書店。  
クセノフォン、根本英世訳 (1998) 『ギリシア史』、西洋古典叢書。  
田中美知太郎 (1969) 『田中美知太郎全集 第4巻』、筑摩書房。  
田中美知太郎 (1970) 『ツキディデスの場合』、筑摩書房。  
田中美知太郎 (1971) 『プラトン「饗宴」への招待』、筑摩書房。  
田中美知太郎 (1976) 『ソフィスト』、講談社。  
田中美知太郎 (1979) 『プラトン I 生涯と著作』、岩波書店。  
ディオゲネス・ラエルティウス、加来彰俊訳 (1984) 『ギリシア哲学者列伝 (上)』、岩波書店。  
ディオゲネス・ラエルティウス、加来彰俊訳 (1984) 『ギリシア哲学者列伝 (中)』、岩波書店。  
ディオゲネス・ラエルティウス、脇條靖弘・木下昌巳訳 (2008) 「プラトン伝」、中畑正志編『プラトン哲学入門』所収、西洋古典叢書。  
プラトン、岩田靖夫訳 (1997) 『パイドン』、岩波書店。  
プラトン、加来彰俊訳 (1975) 「ゴルギアス」、『プラトン全集9』所収、岩波書店。  
プラトン、久保勉訳 (1952) 『饗宴』、岩波書店。  
プラトン、田中美知太郎訳 (1966) 『テアイテトス』、岩波書店。  
プラトン、田中美知太郎訳 (1975) 「アルキビアデス I」、『プラトン全集6』所収、岩波書店。  
プラトン、田中美知太郎訳 (2002) 『ソクラテスの弁明ほか』、中央公論社。  
プラトン、長坂公一 (訳) (1975) 「第七書簡」、『プラトン全集13』、岩波書店。  
プラトン、藤沢令夫訳 (1967) 『パイドロス』、岩波書店。  
プラトン、藤沢令夫訳 (1975) 「国家」、『プラトン全集11』所収、岩波書店。

- プラトン、藤沢令夫訳（1988）『プロタゴラス』、岩波書店。
- ブルタルコス、柳沼重剛訳（2007）『英雄伝 2』、京都大学学術出版会。
- 森進一（1961）「アルキビアデス～饗宴における～」、『西洋古典学研究』IX、34-52頁。
- 山本巍（2016）『プラトン 饗宴 訳と詳解』東京大学出版会。
- 山本光雄訳篇（1958）『初期ギリシア哲学者断片集』、岩波書店。
- 米澤茂（2000）『ソクラテス研究序説』、東海大学出版会。
- 米澤茂（2011）「アイスキネスの『アルキビアデス』と史的ソクラテス」、『教育学論集』7巻、1-25頁。
- Annas, J. (1985) "Self-Knowledge In Early Plato", In Dominic J. O'Meara, *Platonic Investigations*, Catholic University of Amer press, pp. 111-138.
- Bloedow, E. F. (1992) "Alkibiades [Brilliant], or [Intelligent]?", *The source of Historia: Zeitschrift für Alte Geschichte*, Bd.41, H.2, pp. 139-157.
- Blondell, R. (2002) *The play of Character in Plato's Dialogs*, Cambridge.
- Burnet, I. (1961a) *Platonis Opera*, t.II, Oxford.
- Burnet, I. (1961b) *Platonis Opera*, t.III, Oxford.
- Dover, K. (1980) *Plato: Symposium*, Cambridge.
- Denyer, N. (2001) *Plato: Alcibiades*, Cambridge.
- Denyer, N. (2008) *Plato Protagoras*, Cambridge.
- Dittmar, (1912) "Aeschines von Sphettos" Berlin weidmansche Buchhandlung.
- Berry, E. G. (1950) "The Oxythynchus Fragments of Aeschines of Sphettos", *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, pp. 1-8.
- Effe, B. (1971) "Platons Charmides und der Alkibiades des Aischines von Sohettos", *Hermes*, vol. 99, pp. 198-208.
- Gribble, D. (1999) *Alcibiades and Athens : a study in literary presentation*, Oxford.
- Helfer, A. (2017) "Socrates and Alcibiades Plato's Drama of Political Ambition and Philosophy", University of Pennsylvania.
- Heidel, W. A. (1896) *Pseudo-Platonica*, Baltimore, The Friedenworld company.
- Jakub, J. (2009) "Authenticity of the Alkibiades: some reflections", *Listy filologicke, folia philologica* vol. 132, no3/4, pp. 226-244.
- Littman, R. J. (1970) "The love of Alkibiades", *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, vol. 101, pp.263-276.
- Moses, H. (1950) *A History of Greek literature*, Columbia University.
- Schlerermacher, F. (1836) inWilliamDobson, trans, *Schreiermacher `introductions to the dialogues of Plato*, Cambridge, pp. 328-336.
- Szlezak, A. T. (2004) *Das Bild des Dialektikers in Platons späten Dialogen*, Berlin: W. De Gruyter.

- Todd, O. J. (1932) *Xenophon: Anabasis books, and Symposium and Apology with an English translation*, Harbard University press.
- Westerlink, L. G. (2003) *Prolegomènes à La philosophie de Platon*, Paris.